願と『観経』の菩提心は称名の力により往生することすなわち無生を得ることを言うと述べ、この益を求めるために菩提心と言うのである、とする。このように菩提心について、自力修行の聖道の心としての菩提心と往生浄土の菩提心と同じ言葉ではあるが、意味を分けて解釈しているのである。

第三項　行具の三心

隆寛の残された著作の中、和語のものには自然に三心が具するという言葉があるが、漢文体のものにはない。和文体にあるのは正しく法然の言う行具の三心であるが、漢文体のものではむしろ他力の三心を強調するのである。しかし、行具の三心の根拠になる解釈は見ることができる。

まず『捨子問答』巻上には法然の言葉として

三心ハコマカニ沙汰シテ知ネドモ。念仏ダニモ慇ニスレバ。自然ニ具足セラル、也。サレバコソ。三心ト云名ヲダニモ知ザル在家ノ無智ノ人ニモ念仏シテ神妙ニ往生スル事ナレト

（『続浄』九、七頁上）

と言い、『閑亭後世物語』巻上では

又ただ念仏を申せば。一文不通の云にかひなき者共も往生すと㕝候へば。三心はしらねども。自然に具せらるる事にて候也

（『同書』九、三五頁下）

とある。これらは法然の言葉をそのまま受け止めたものとして注目される。また『閑亭後世物語』巻上には、行具の三心を説明した文章が見られる。すなわち、法然の言葉として、

詮ずる所弥陀を頼みて。偽らず真実なる心は至誠心也。我身のわろきに付ても。深く疑はざるは深心也。念仏に依て極楽に生る事を得べしと思定たる心は。回向発願心なりと教え給へり。是程の心ばへは。如何なる無智の者も具しぬべき心也。いかなる智者も只此心におちゐて念仏は申也

（『同書』九、三五頁下）

と言う。

隆寛の解釈で興味深いのはこの行具の三心の根拠を示す部分である。『具三心義』巻上にその根拠となるべく理論展開がなされている。

結論から言うとそれは本願の三心であるからとする。これは法然の根拠と同一であるが、

それをさらに『観経疏』散善義にある「一明世尊随機顕益意密難知」の意密を解釈して行具の三心をも当然含むと考えていたように受け取れる。本願の三心と『観経』の三心については次にも述べるが、隆寛は完全に同一視している。そこで本願の念仏とは三心具足の念仏であると言い、その義は

> 称名号帰本願故称名号者不疑本願故称名号者被催欲生心故也
> 定知一称名号之声中三心具足無有欠減
>
> （安井広度『法然門下の数字』昭和十三年、附録一一一～一二頁）

であると言う。ここで「随機顕益」より、三心を発すべき人は他力に乗じて益を得る人である、と言うのである。それは取りも直さず罪悪生死の凡夫にほかならない。凡夫は他力に乗じて本願である念仏を称えれば、そこに発すべき三心が一声のうちに含まれているという理論展開をしているのである。またこの理論を指して意密と解釈するのである。

第四項　三部経を巡る三心の問題

隆寛は一貫して『観経』の三心と第十八願の三心それに『阿弥陀経』の一心を全く同じものであると見ている。特に本願の三心を行具の三心、それにあとで述べる他力の三心の根本